

泉鏡花「龍潭譚」の表現について

——〈幼児の意識〉をめぐって——

梅山 聡

岡保生氏は「龍潭譚」について⁽¹⁾でこう述べている。

「ここでひとつ断わっておきたいのは、千里という子どもが学齢以前の、かぞえ年で五歳ぐらいの幼児である、という点で、「龍潭譚」についての世間に数多い解説文では、しばしばかれのことを「少年」と書いておりますが、わたしはこのことはに不満を持ちます。ましてや、この作品を鏡花に数多い少年物の一つとして加えるような見方には賛成できません」。

「龍潭譚」(明治29・11⁽²⁾)は鏡花初期の傑作として知られたものである。小児が山中の「九ツ笹^{このたば}」という異郷に迷いこみ、神とも魔ともつかぬ妖しい美女と一夜を過^こして、町へ帰還する。いかにも鏡花の小説らしい異界譚であり、「高野聖」(明治33・2)の先行作という評価が定着して久

しい。ただ、この物語の主人公である「われ」≡千里という人物が、岡氏のいうように「学齢以前の幼児」であるという点を、どのように考えるべきなのだろうか。

「龍潭譚」という小説は、言葉をまだ満足には操れぬらしい幼児による「一人称語り」という、フィクショナルな側面を有している。同時に作品末尾では、これが成人した千里の回想する物語であったことが明かされ、一人称「われ」は青年千里でもあるわけである。そのほか、回想する千里より上位の「語り手」も内在していると考えられる。さらにそれが、文章の上では擬古典的な文語体で書かれており、文体上の古典的な印象からは千里が幼児であることさえ見えにくい。そのようなある種矛盾した、複雑に混濁した小説表現であることを、よく考えてみる必要があるの

ではないか。

そのうえで、なぜ幼児なのか。千里はなぜ幼児でなければならぬのか。幼児の一人称語りを文語体で書くということに、どんな意味があったのか。私見ではそうした点こそ、「龍潭譚」読解の出発点として考察されねばならない問題であるように思われる。

一

「龍潭譚」に主人公の年齢を特定できる記述はない。しかし作中の端々の表現をみるかぎり、千里が幼児として描かれていることはほぼ自明である。

・《…つ、じの花の、わが丈よりも高き処、前後左右を
啖埋めたる…》（鎮守の社）

・《こは予^{かな}てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく
似たれば尊き人ぞと見き》（五位鷹）

・《乳をのまむといふを姉上は許したまはず》、《乳の味は
忘れざりしかど》（九ツ餅）といった母乳への執着

・《いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔
なつかしくしばらくも得堪へずなりたり》（鎮守の社）と
いった姉への精神的依存

この作品の語りないし叙述は、基本的には幼児の目線で見

たものを語り、幼児の意識内容を語っている。そういうものとして読まれるべきであることは疑いをいれない。岡論文の触れている、地面に文字を描いて遊ぶ場面（鎮守の社）などもそうである。また「九ツ餅」の章で、女が千里と共に寝をしながら《をさな物語ニツ三ツ聞かせ給ひつ》とあって、つづいて土地の名を口授する場面、

『二ツ餅、坊や、ニツ餅といへるかい。』／『二ツ餅。』

／『三ツ餅、四ツ餅といつて御覧。』／『四ツ餅。』

『五ツ餅そのあとは。』／『六ツ餅。』／『さうく／＼七

ツ餅。』／『八ツ餅。』／『九ツ餅——こ、はね、九ツ

餅といふ処なの。（後略）』

これにしても、幼児に口から言葉を覚えさせようとしている場面と読むしかないだろう。千里がまだ十分に言葉を話せる年齢でないのだからことも察せられる。ついでに言えば、作中で千里自身の発話・発語が直接（会話文として）記される箇所は他に一つしかない。

この小説で語られる幼児千里の思考や情緒のながれは概して気まぐれで、不安定で、ときに不条理に近い。冒頭近く、斑猫に遭遇する場面がよい例である。捉えようとする^と遁げられて《いつもおなじほどのあはひを置きて》前に止まる虫を、千里は《いと憎さげなり》と思うのである。

われは足踏して、心いらてり。其居たるあとを踏みにちりて、

『畜生、畜生。』

と眩きさま躍りかゝりてハタと打ちし拳はいたづらに土によごれぬ。

渠は一足先なる方に悠々と羽づくろひす。憎しと思ふ心を籠めて瞻りたれば、虫は動かずなりたり。つく／＼見れば羽蟻の形して、それよりもや、大なる、身はたゞ五色の色を帯びて青みがちにカッヤきたる、うつくしさいはむ方なし。

色彩あり光沢ある虫は毒なりと姉上の教へたるをふと思ひ出でたれば、打置きてすこ／＼と引返せしが、足許にさきの石の二ツに碎けて落ちたるより俄に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒虫をねらひたり。(躡躪か丘)

千里の心情推移(波線部分)をたどつて読めば、『心いらてり』という理不尽な怒り、虫をひたすら《憎しと思ふ》執拗な攻撃衝動、しかしその色を見れば《うつくしさいはむ方なし》と嘆ずる感受性。ふと姉の教えを思い出して意気阻喪するものの、石ころを見ると《俄に心動き》殺意が再燃するなど、ほとんど唐突に、ささいなことで気持ちが二転三

転していくさまが読みとれる。

同様に「鎮守の社」から「かくれあそび」冒頭にかけて、山道で極度の不安におそわれた千里が、ようやく気を持ち直して神社の境内にたどり着いた場面。

さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いふことを肯か一人いで來しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ、優しき人のなつかしけれと、顔をあはせて謂ひまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に帰らむとはおほはず、ひとり境内にイみしに、…(かくれあそび)

ここで《渠に認められしぞ幸なる》という文の解釈が問題になっていることについては次節で論じる。波線部分の述懐は、いかにも頑是ない幼児の見栄張りの心理を語っている。先刻までの恐怖や心細さを一切忘れたように《嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に帰らむとはおほはず》などと言ひ出す。ところがその後、一緒にかくれ遊びをしていた子どもたちがいなくなってしまうと、今度は手のひらを返すように《親しき友にはあらず。常にうとましき兒どもなれば、かゝる機会を得てわれをば苦めむと

や巧みけむ」などといった疑心暗鬼を語り始めるのである。

「龍潭譚」の全編にわたって、まさしく「頑是ない」というほかない幼い思念、混沌として脈絡を欠いた想念、そういうったものがごとごとと語られている。そしてそれはない絶対的な不安や、怖さの感情。姉や庇護的女性への一貫した依存心。同時に彼女らへのゆえなき不信任、猜疑心。美意識や感受性のつよさ。かつて「狐憑き」などと呼ばれた一種の喪心状態。そういった種々の要素をひっくるめてここで〈幼児の意識〉と呼ぶことにすれば、「龍潭譚」は〈幼児の意識〉の言語による形象化をおこなった小説であるとひとまず言うことができるだろう。

ところで本作が回想体小説でもあることについて考えてみなくてはならない。一人称「われ」の語り全体に《年少おとこ清きよき海軍の少尉候補生》となつた現在の千里の回想という側面があるのは事実で、またそれなしでは成り立たない物語なのも確かであろう。本作のように「われ」の心理の委曲をきわめて粘着的に、理詰めに詳述していく語り方が、回想者の理性を一旦介してでなければあり得ないものなのを言うまでもない。

だが一方で、幼児の情動、幼児の感興の生々しい溢出こ

そが「龍潭譚」の特色をなしていることもまた事実である。作中のそこかしこで奔放な〈幼児の意識〉が、回想の文脈を上回って語りを牽引しているといつてよく、そうでなければ先に見たような、あれほど道理の立たない、筋の通らない思念の流れを精細に語っていく理由がない。

この点に関し、由良君美が「化鳥」（明治30・4）の文体について「少年の〈内的独白〉をそのままに生まの口語体に定着する」語りの実験と評していること³⁾を一部参照できるように思う。「龍潭譚」の擬古文体は、すぐ後に書かれる「化鳥」の新鮮な口語体とはおよそ対照的なものだが、表現としては通底するものがある。「龍潭譚」が擬古文という外衣の下で「化鳥」に通ずる表現を行っていることは案外見落とされていように思われる。逆にいえば「龍潭譚」の文語は、「化鳥」の語りに文語体のコーティングを施したようなものと捉えてよい面があるのではないか。

「龍潭譚」全編が〈内的独白〉に覆われているとは無論いえない。しかしこの小説のすべてを回想者によつて統御された語りと見做すこともまた当を得ない。明らかに矛盾する二要素がせめぎあっている。一方では回想語りによる省察的な叙述があり、一方では〈内的独白〉風に示される〈幼児の意識〉が前景化している。幼児の〈内的独白〉は

しばしば回想の文脈をすり脱け、語りの統御に逆らおうとする。

路の右左、躑躅の花の紅くれなゐなるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。空よく晴れて一点の雲もなく、風あた、かに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと優しき姉上のいひたりしを肯かきで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。(躑躅か丘)

書き出しに近い一節であるが、全体としては坂を登っていく幼児の臨場的な語りの上に、回想語りの層が重ねられているとみればよい。ただ、『空よく晴れて…』の対句的な一行はかなり修辭的な性格が強くと、『優しき姉上のいひたりしを…』や『おもしろきながめかな』には、幼児千里の内言が〈内的独白〉風に露出してのように読める。

整理すればこの小説の語り・叙述はおよそ三つの要素を併せもつと考えられる。幼児による〈内的独白〉的な要素。回想者による語りの要素。そしてその二つを同居させている文語体の文章。文章上の修辭技法もある種の表現効果及ぼしている。そうした多面的な表現がこの作品においてどのような意味をもっているか。それを検討してみたい。

二二

「かくれあそび」冒頭の一節を再度とり上げる。傍線部の文が従来から疑問とされてきた箇所であるが、この解釈にも〈幼児の意識〉が関わってくるからである。

さきにわれ泣きいだして救すくひを姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸さいはひなる。いふことを肯かきで一人いで来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ、優しき人のなつかしけれど、顔をあはせて謂いひまけむは口惜しきに。

問題は代名詞「渠」が誰を指すのかということである。文脈からいえばすぐ上の「姉」が「渠」の先行詞になるはずだが、「姉」は千里を救けには来なかつたのだから、『渠に認められし』とあるのが内容と齟齬してしまう。

「龍潭譚」の現代語訳を手がけた秦恒平氏が訳注の中に「この渠とは何か。(略)鏡花原稿では「認められ」のあとに二分の抹消があり、訳者は、「ざり」という打消語であつたろうと思う。そうなら「渠」は「姉」を意味して至極穏当だが、初出以来文章に異同がない」と問題を提起し、議論の発端となつたものと思われる。自筆原稿(慶応義塾図書館蔵)上では「認められ」と「し」の間に確かに「二

字分の抹消」が認められ、判読困難であるが、もともと「ざり」と書かれてあつた可能性は高い。

そのことも含めて、「渠」はやはり「姉」と読むのが正しく、本来この文は否定文であるべきだとする見解には、一応理があるとおきたい。

一方で、本文通りに肯定文として読み、「姉」以外の指示対象を考へるものとして、管見のかぎりではこれまでに四通りの解釈が提唱されている。

①秦恒平の現代語訳。当該箇所を「先刻山なかで、泣いて助けてと姉を呼んだ時、瀧の音や「もういいよ」に前途を誘つてもらえて、ほんとに良かった」と訳す。

②寺田透。「この「渠」は文の表ではまだ先行詞の役を果たしていないが、九ツ罅の谷の女王を指すだろう」。

③吉村博任。「「渠」とは（略）明らかに斑猫」。

④M・コディ・ポールトンの英訳。「渠」は社の境内で遭遇する怪しい女を指しているとす⁽⁸⁾。

以上、「姉」と読む解釈も含めて五つの読み方があることになるが、本稿の見解を示せば、①の秦氏の解釈がもっとも正解に近いものであると考えたい。

問題の文に先立つて《さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを》とあるのは、前章「鎮守の社」の次の部分に

言及しているだろう。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄ませば、遙かに瀧の音聞こえたり。どうくんと響くなかに、いと高く牙えたる声の幽に、

『もうい、よ、もうい、よ。』

と呼びたる聞こえき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ図なることを認め得たる、一声くりかへすとハヤきこえずなりしが、やうく心たしかに其声したる方にたどりて：

このとき千里は、声のかぎりに泣き喚いて姉を呼ぼうとし、応える声がないかと耳をすませて待った。遠くで瀧の音が聞え、それに混じつてかすかに『もうい、よ、もうい、よ』の呼び声が聞えてくる。千里はその声を耳にして、『いとけなき我がなかま』たちが自分のことを見つけて呼びかけてくれたように感じた。そこで声のした方へ向かうと、あつけなく躑躅の迷路をぬけ出し、迷子の恐怖からのがれることができたのである。

おそらくそのことを思い出しながら、《渠に認められしぞ幸なる》と千里は回顧しているのだろう。よって、私見では「渠」とは直接には『もうい、よ』の声を指し、幼児「わ

れ」の意識においては《いとけなき我がなかま》を思い描いている。「渠」をしいて現代語訳するなら「あの声」などと訳してよく、秦氏の訳にある「瀧の音」まで含める必要はないだろう。そう考えたい。無論『もうい、よ』の声は（もしこれが本当に子どもたちの遊び声だったならば、客観的に考えて千里とは何の関係もないはずのものである。しかし千里は、幼児の自己中心的な感覚、ないし自他未分的な外部感覚から、自分を遊びに誘っている声としてそれを受けとつたのである。前後の文脈が幼児的思考につよく傾いていることからそのように考えたい。

とはいえ「渠」をそう解したとしても、なお疑問は残される。『もうい、よ』の声の主は何ものなのかということである。

面を蔽へといふまゝにしつ。ひツそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる瀧の音だうくと松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

『もう可よ、もう可よ。』

と呼ぶ声符に響けり。眼をあくればあたり静まり返りてたそがれの色また一際襲ひ来れり。大なる樹のすくくとならべるか朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。（かくれあそび）

かくれ遊びの鬼になった千里。だが一緒にいた子どもたちはみな消えさっている。ふたたび瀧の音とともに、『もう可よ、もう可よ』の声が遠くでこだまする。これは明らかに先の引用場面の意図的な繰り返しであり、結局『もうい、よ』の声は千里を惑わそうとする、まやかしの声だったということなのだろう。こだまの怪のようなものが千里を翻弄しているのである。であれば、見知らぬ子どもたちもまた、何ものかが見せていた幻であつて、初めから実在はしていなかったと読むことも不可能ではない。

そもそも千里は山道に踏み入つてからというものの、さまざまな怪事に翻弄されつづける。《走りおりて走りのほりつ。いつまでか恠てあらむ、こたびこそと思ふに違ひて、道はまた畝れる坂なり》（鎮守の社）という、無限にループする果てのない坂道、躑躅の迷宮。そこからしてすでに現実ではなく、おそらくは斑猫の毒が見せた幻覚であつた。それから千里が次々と出遭う怪異を列挙すれば次のようになる。『もうい、よ』の声。かくれ遊びの子どもたち。境内に現れる《顔の色白くうつくしき人》。捜しにきた家人および姉らしきひと。《もの》や《四足のもの》の気配。銀杏の樹の下に見た姉に似た女。千里を誤認して去つた姉（らしきひと）。そして、九ツ符の女。

これらすべて幻であったと読んでもおかしくはない。事態はまさしく千里自身が《怪しき神のさま／＼のこととなぶるわ》(大沼)と了解している通りだったのかもしれないのだ。境内で遭遇した《極めて丈高き女》と、銀杏の樹の下の子とは、はたして同一人であるのか、あるいは、九ツ笹の女そのひとだったのかどうか。千里の顔を見分けられずに去ってしまう姉も、本当に姉本人だったのかどうかわからない。それら一切が不分明に語られているのである。くるま山の山中には人を誑かす《もの》なり《怪しき神》なりが数多く巢食っているということなのかもしれない。それでは九ツ笹の女とは何ものなのか。彼女もまた卑しい神魔の類であったのか、それとは何か違うものなのか。だがそれを問うのは結局のところ無意味であろう。「龍潭譚」の物語はそうした点について、きわめて曖昧なものではない。

話を戻せば、『もうい、よ』の声が何ものの仕業であるかは全く不明で、九ツ笹の女とそのものとの関係も知りようがない。正体のわからない何かが千里を誑かそうとして呼びかけた声なのである。その意味では、先行詞のない「渠」というあいまいな指示語の使用には一種の必然性が伴っているともいえる。

《渠に認められしぞ幸なる》という文は、基本的には幼児千里の、「あの声に(＝あの子たちに)呼んでもらえてほんとはよかった」という気持ちを表している。だがこの「渠」は、実際は千里の信じたような《いとけなき我がなかま》ではない。そのことを千里は知らないでいる。謎めいた「渠」によって文意が多重化するのである。深読みするならば、「ほんとによかった」という千里の感懐自体、すでに正常な判断を失って錯乱した思考であるとも、《怪しき神》に操られた心理状態とも読み得るものである。単純な幼児心理を語っているとみせかけて、それとなく怪異の影をしのび込ませ、(幼児の意識)に奥行きと陰影を与えている。作者は意図的にそのような表現を仕掛けていると見てよいだろう。

三

〈幼児の意識〉と回想語りの関係を考える上で、もっとも興味深い問題を提示するのは「ふるさと」以降の章段である。千里は町へ帰還してのち、「狐憑き」の子どもとして扱われ、家人や町の人間から迫害を受ける。物語が急に暗さを帯びるということが言われるが、それは必ずしも物語内容のみの問題ではない。一人称で話者自身の「狂気」が語られる(かのように見える)という、叙述や語りのあり方

にも関わる問題なのである。

だがまずは、帰還後の千里が「狂気」なるものにとり憑かれてしまったわけではないということ、はじめに確認しておく。左の一節は町へ戻って後の千里の感懐である。

口惜しく腹立たしきまゝ、身の周囲はことごとく、敵ぞと思はれたる。町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何等のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見て其弟を忘れしことあり、塵一つとしてわが眼に入るは、すべてものゝ化したるにて、恐ろしきあやしき神のわれを悩まさむとて現じたるものならむ。(ふるさと)

次の箇所は社の境内で錯乱に陥った際の叙述である。

いかなればわれ姉上をまで怪みたる。(略)

涙ぐみてイむ時、ふと見る銀杏の木のくらき夜の空に大なる円き影して茂れる下に女の後姿ありてわが眼を遮りたり。あまりよく似たれば姉上と呼はむとせしが、よしなきものに声かけて、なまじぬにわが此処にあるを知られむは、拙きわざなればと思ひてやみぬ。とばかりありて其姿またかくれ去りつ。見えすなればなほなつかしく、たとへ恐ろしきものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化したる上は、われを捕

へてむこからむや、さきなるは然もなく、いま幻に見えたるがまこと其人なりけむもわからざるを、何とて言はかけざりしと打泣きしがかひもあらず。

あはれさまのものの、怪しきはすべてわが眼のいかにかせし作用なるべし、さらずは涙にくもりしや、術こそありたれ、かなたなる御手洗にて清めてみばやと寄りぬ。(天沼)

傍線部および波線部でほぼ同じことが語られているのは明白であろう。最愛の姉をなぜか信じられず、疑ってしまうという悲痛な思い。怪しいものの仕業で自分は狂わされているのだという惑乱と狐疑逡巡。

つまり山中彷徨の場面と帰還後の物語とで、語られる意識の内容に大きな違いはない。その同じものが、小説後半ではあたかも「狂気」のように感じられる。それは千里に対し《つま、れ》《さらはれもの》《気狂》《狐つき》といった、社会の言葉が次々に投げつけられるせいでもある。それらをまとめて「狂気」と言いかえるならば、「狂気」のレットルによつて千里の〈幼児の意識〉の純粹さが毀たれていく。その代わり社会的な「狂気」というものが作りだされていく。「龍潭譚」後半はそうしたドラマを語っている。「ふるさと」以下の章は決して千里の「狂気」を語るも

のではない。「狂氣」を語るゆえに奇妙な語りになるのもない。ならばそこで、語りないし叙述に異様なねじれの生じる箇所が見るのは、一体何が問題なのだろうか。千里が叔父の奈四郎に《引立て》^{ひつた}られ、家の三畳間の《柱に縛め》^{いしばし}られる場面で、次のように語られる。

近く寄れ喰さきなむと思ふのみ、齒がみして睨^にらまへたる、眼の色こそ怪しくなりたれ、逆つりたる毗は憑きもの、わざよとて、寄りたかりて口々にの、しるぞ無念なりける。(ふるさと)

やや奇妙な一文である。《近く寄れ喰さきなむ》というのは千里自身の意識であるとしても、つづく《齒がみして睨らまへたる》や《眼の色こそ怪しくなりたれ》は、千里の主観と、人々が見ている彼の様態と、どちらに属すのだろうか。《憑きもの、わざよとて、寄りたかりて口々にの、しる》は千里を遠巻きに眺める人々の言動であるが、文末は《…ぞ無念なりける》と、ふたたび千里の心情にかえつて結ばれている。また次の箇所では、

やうやくいましめはゆるされどなほ心の狂ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人の疑を増すをいかにせむ。ひしと取籠めて庭にも出さで日を過ごしぬ。(同)

波線部の文は主語があいまいに入れ替わっているようにも読める。以上のような主格の揺らぐセンチメンスが、文語体であるゆえにかろうじて成り立っているのである。

文章にそうしたねじれが生じるのには、大きく二つの理由が考えられる。一つには、「ふるさと」以後、千里以外の人物(奈四郎、姉、家人、町の人々)が物語に出入りし始め、彼らの視線で見た千里を描かざるを得なくなるためである。千里の視点と、他者の視点との対立がそこに生じる。あるいは千里の言葉と他者の言葉との衝突が生じる。

『ま、やつと取返したが、繩を解いてはならんぞ。もう眼が血走つて居て、すぎがあると駆け出すじや。魔^マどのがそれしよびくでの。』

と戒めたり。いふことよくわが心を得たるよ、然り、隙^{ひま}だにあらむにはいかでかこ、にとまるべき。(同)

波線部分《いふことよくわが心を得たるよ》云々は、やや衝動的にきこえる。本当に狂ってしまった思考が語られているようだからだ。しかし考えれば《隙だにあらむにはいかでかこ、にとまるべき》という、九ツ罫に懂れて山へ向かおうとする想いは千里にとってごく自然なものであつて、作中一貫した《幼児の意識》以外の何ものでもない。奈四郎の台詞との対比によってそれが異常な言葉のように

見えてしまうのである。

もう一つの理由は、むしろ「回想する青年千里」と「幼児千里」の対立に関わるものである。たとえば次の箇所を見たい。

…世にたゞ一人なつかしき姉上までわが顔を見ることに、氣を確に、心を鎮めよ、と涙ながらいはるゝにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやう其毎になりまさりて、果はまことにものくるはしくなりもてゆくなる。

たとへば怪しき糸の十重二十重にわが身をまどふ心地しつ。しだい／＼に暗きなかに奥深くおちいりてゆく思あり。それをば刈払ひ、遁出でむとするに其術なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を擧め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂などするにぞ、氣あがり、心激し、たゞちれにちれてすべてのもの皆われをばらだ、しむ。(同)

この一節では、語られている心理自体はたしかに異常に思える。しかし波線の《われとわが身を》《果はまことに》《たとへば》《しだい／＼に》《それをば》といった語句をみれば、これはむしろ自らの心理状態を冷静に対象化して物語るものであって、回想調が勝つていてもいえる。内容に

反して語りはむしろ安定している。こうしたタイプの叙述も作品後半によく見られる。しかしその少し後では、

さればぞ姉がわが快復を祈る言もわれに心を狂はずやう、わざと然はいふならむと、一たびおもひては堪ゆべからず、力あらば恣にともかくもせばせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、搔むしらむ、透あらばとびいで、九ツ筈とをしへたる、たうときうつくしきかのひとの許に遁げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、ふた、び暗室にいましめられぬ。

(同)

ここはどちらかといえは、不条理な思考を直接ぶちまけるような語り口になる。《近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、搔むしらむ》といった、幼児千里の内言をむき出しのまま並べ立てる挿入句によって、回想語りの文脈がしばし破られてしまうのである。

「回想する千里」と「幼児千里」の対立ということを、もう少し一般化すればこれは「語る『われ』／語られる『われ』」の分裂や対立ということが出来る。そしてこのこと自体は何も特殊ではない。一人称の小説一般における必要条件であるといってもよい。語り手と主人公の不即不離の二重化は、物語の語りというものの最も基本的な性質であ

ろう。しかし「龍潭譚」において問題なのはむしろ、幼児の〈内的独白〉的な要素と、回想語りの要素とが、文語体の文章の中で不調和に同居させられているという点なのである。帰還後の章段でそれが特に顕在化し、劇的な葛藤を見せている。

その上に、「正気／狂気」という二分法の問題が重なっている。もしも「回想する青年千里＝正気」が「語られる幼児千里＝狂気」を、完全に統御して物語るのであれば、語りそのものは安定した「狂気」の叙述にもなり得る。というより、そういう語りの仕方によってこそ「狂気」というものが生まれてくる。だが「龍潭譚」の場合、語りは完全に「回想する青年千里」の側に立つのでもなく、完全に「語られる幼児千里」の側にいるのでもない。したがって叙述は「正気」にも「狂気」にも落着くことがなく揺動をつづける。そのことで「正気／狂気」の線引きを機能しなくさせている。「龍潭譚」は「正気／狂気」という図式によって生まれる「狂気」を語っていない。まさにそれゆえに、異様な語りという印象を与えるのである。そしてそれは、この小説が回想者の物語によって完全には統御されない〈幼児の意識〉を浮上させていることとパラレルな関係にある。「龍潭譚」は、大人の回想によって再構成される幼

児の内面を語るものでは必ずしもなく、むしろそのような回想語りを攪乱するものとして〈幼児の意識〉を噴出させているのである。

また、そうした表現のために文語体が有効に働いていることにも注意したい。すなわち擬古的な文語文を、構文や統語法上のある種の自由さを許す文体として利用する。それによって、先に見たような主客の定まらない複視点のセンチンスを作りうる。あるいは直接語法を引用符なしに地の文に埋めこむことができるため、《近く寄り喰さきなむ》、《いふことよくわが心を得たるよ》のような、語りの文脈を離れた〈内的独白〉を容易に行うことができる。まとめれば、「龍潭譚」は文語文の性質を逆手にとるような表現の戦略によって〈幼児の意識〉の形象化を行おうとした小説なのである。

四

本節では「龍潭譚」の修辞表現について補足的に論じた。文章上の修辞技法が、語りの問題とはまた別の径路から〈幼児の意識〉を表現する役割を担っていることを指摘したいためである。

《日は午なり。あら、木のたらく、坂に樹の蔭もなし。》

という冒頭文は、李賀の「月午樹無影／一山唯白曉」（感
諷 其三）という詩句を想起させる。ただし鏡花がこれを
典拠として用いたかどうかは確認できていない。李賀の詩
は「月午」すなわち月が中天にあつて樹に全く蔭ができず
「一山唯白曉」という状態をいうのだが、同時に「月午」
は鬼や妖魅の跳梁する魔の時間という発想でもあるらし
い。⑩。「龍潭潭」の場合は正午であるが、同様に蔭深いはず
の林道にまったく日陰のない特別な状態を意味しており、
このときすでに千里が魔的な時空に足を踏み入れているこ
とを暗示しているのだろう。この冒頭文が「日ハ午ナリ。
アラ、木ノタラ、坂（ザカ）ニ樹ノ蔭（カゲ）モナシ」と、
ア列音の連なりを響かせていることも詩的表現への傾斜を
示すものとして注意したい。

また作品前半（躑躅か丘）「鎮守の社」で、「あかし」
という語を二重の意味（「明」と「赤」）に掛けて多用して
いることも指摘しておきたい。⑪。

・《行く方も躑躅なり。来し方も躑躅なり。山土のいろ
もあかく見えたる、あまりうつくしさに恐ろしくなりて》
・《赤土の道巾せまく、うねり／＼果しなきに両側つゞ
きの躑躅の花、遠き方は前後を塞ぎて、日かげあかく咲
込めたる空のいろの真蒼き下にイむはわれのみなり》

・《立あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組み
あはひも透かて躑躅咲きたり。日影ひとしほ赤うなりま
さりたるに、手を見れば掌に照りそひぬ》

・《背後には躑躅の花飛び／＼に咲きて青き草まばらに、
やがて堂のうらに達せし時は一株もはなのあかきはな
く

て》
・《前後左右を咲埋めたるあかき色のあかきがなかに》
二つ目の引用では「アカツチのミチハバ」、「うねり／＼」、
「両側ツヅキの花」といった音の反復が目立つ。
また《あかく》を掛詞的に用いながら《日かげあかく咲込
めたる空のいろの真蒼き》という圧縮された表現を行って
いる。五つ目の引用の《あかき色のあかきがなかに》とい
った、一見稚拙な重複も意図的なものであったことがわか
る。

言葉の多義性や音の響きの前景化は、詩的言語的な性質
を示す徴候となる。そしてそれは《幼児の意識》の感受性
のあり方と結びつく。

たゞひとへにゆふ日照りそひたるつゝ、じの花の、わが
丈よりも高き処、前後左右を咲埋めたるあかき色のあ
かきがなかに、翠と、紅と、紫と、青白の光を羽色に
帯びたる毒虫のキラ／＼と飛びたるさまの広き景色の

みぞ画の如く小さき胸にゑが、れける。(鎮守の社)

この一節はただ美しい幻想の情景を述べているのではなく、「あかき」の両義的使用、および色彩語の羅列などによって、幼児の言語以前の審美的感覚を間接的にあらわそうとしている。「毒虫」も「つゝじの花」も、実際は千里を恐怖に陥れた怪異だったのだが、(幼児の意識)のなかでそれが《あまりうつくしさに恐ろしくなりて》(躑躅か丘)といった、恐怖と背中合わせの極度の美的体験でもあったことを語っているのである。

「龍潭譚」の文は同時代にたとえば次のように評されていた。《渠の師宗とする所の文、源氏物語なるか、徒然草なるか。その捏くりたる、廻りくどくしたる節奏なき、何ぞ一に斯の如くなるや。渠は晦洪といふことを作文の第一義に置き、達意といふことを最後に置きたるもの、如し》(八面楼主人¹⁸)。あるいは《文字は徒らに冗漫にして意を成すこと難く、景を叙し事を記する、朦朧としてたゞ雲を捕ふるが如し。(中略)われ等近來かくの如き解し難き文字を読みしことあらず》(荒川漁郎¹⁹)。すべての評がこうした論調をとるわけではないが、この作品の文章が同時代読者の目にも奇異なもの、不透明なものと映っていたことは確かである。

しかしそれは当然であった。「龍潭譚」の文章は、文語体のシンタククスを利用して幼児の〈内的独白〉に近い表現を試みる、あるいは擬古文の詩的修辭を通して幼児の感受性を暗に示す、そうした表現の冒険だったからである。一面で、中古文体のあからさまな摸倣などが見られるのは確かである。しかし決してこれは伝統的・規範的な和文を志向したものではない。《日は午なり。あら、木のたらく／＼坂に樹の蔭もなし》のような措辭は伝統的な和文ではあり得ないものだろう。また、伝統的文体は通常ある種の公的な言語主体を担保するものだが、擬古文で幼児の混沌とした意識を綴っていくというのは、あまり常識的な発想ではないはずである。同時代における擬古文体として落合直文らの新国文や、鷗外の雅文小説の文体や、明治三十年代に流行する「美文」などがあったわけだが、「龍潭譚」はそれとどれも違ったやり方で擬古文を我流に活用している。鏡花文学の当時における独自性をそこに見ることもできるのではないか。

結び

はじめに提出した問いにかえれば、本作で千里が「幼児」として描かれることに、どのような意味があったのだろうか

か。無論、年齢的な意味で「幼児」であるか「少年」であるかは問題ではない。しかし「少年」というものを仮に、合理的な判断にもとづいて自主的に行動し、物語のプロットを自ら主導していける主体として考えるならば、「龍潭譚」は決して「少年」の物語ではない。そう読んではいけないものなのだ。

作品冒頭から、千里はなぜ町を離れ、山道を迷い歩くのか。そもそも自らの意思で歩いているかさ、え定かではない。外出の動機としては単に、「一人にては行くことなかれと優しき姉上のいひたりしを肯かで、しのびて来つ」(躑躅か丘)というように、姉の禁止をやぶって冒険することに秘かな悦びをおぼえるという、ただそれだけのことだったかもしれない。それ以上のどんな理由や目的があったかを問うのは作品の性質に反した読みであろう。「龍潭譚」という小説を引っぱっていくのは、意志や目的を伴った主人公の行動ではなく混沌とした(幼児の意識)の流れだからである。この作品で描かれる(幼児の意識)とは、先にも述べたように単なる幼い子どもの思念にとどまらない。夢や幻覚。この世の外へ向かっていく浪漫的性情。怪異との遭遇。「狐憑き」「神隠し」とかつていわれ、今日的には「狂気」とされるかもしれない心身状態。喪った母の乳房をもとめる

幼児心理。同時に自分が母を殺し、姉を殺してしまうかもしれない恐怖。極度の美的体験、審美的感性。そういったものをすべてを内に含む、豊饒な(意識)のありようが「龍潭譚」の主題である。それは合理的なプロットを形成するようなものではないし、成長して理性を獲得することによって失われてしまうかもしれないものである。

物語の結末をどう理解するかにもそれは関わっている。終章において千里は結局どういうことになったのか。物語的にはどのような帰結を意味するのか。重要なのは、結末において成人した現在の千里が、いまなお九ツ笹の女を忘れずに大切に想っているのだという点ではないか。青年千里は《うつくしき人》を追懐しつつ《潭に臨みて肅然と》たたずんでいる。彼の心中は、かつて九ツ笹の女をひたすら《たうときうつくしきかのひと》と念じて慕ったその心のありようと、何も変わっていない。九ツ笹の女だけでなく、狂ったように山をあぐがれさまよった幼時体験のすべては、いまもなお千里の心の中で意味をもって生き続けているというこのことなのではないか。

「龍潭譚」の解釈には従来いくつかの方向性があり、たとえば次のように論じられている。千里はそののち障りなく成人し健全な社会順応を遂げたという、通過儀礼の物語

としての読み方。あるいは、九ツ罅が潭となり龍神は水底に沈むという、伝説的な要素を重視する読み方。民譚や説話の世界ならば宗教的な大団円であり、また神と人間社会の新たな関係を示唆する結末としても読める。そして鏡花的な「母恋い」の主題を読み込むならば、千里の亡き母への想いがいかにして救済されるかという筋書きを描くことができる。以上これらの解釈はいずれも説得力をもち、有意義な観点をふくんでいる。それを踏まえた上で言うのが、「龍潭譚」の結末は、はたして何かが明朗に解決したということなのであるか。むしろ逆なのではないか。

幼時の体験が、現在の千里の前に、あまりにも生々しく甦ってくる。《海軍の少尉候補生》となつた彼の理性を侵食するかのようにな、《幼児の意識》がまざまざと回帰してくる。当然ながら、九ツ罅にまつわる幼時の神秘体験は、現在の千里にしてもそれを完全に意味づけて、整理して物語ることなどできない。青年千里は幼児千里の物語に対して全知の語り手となることはできないのである。作品の末尾で青年千里が、唐突に三人称的な視座から対象化されて記される理由もそこにあるのだろう。「龍潭譚」は、現在から過去を回想する物語であるとともに、過去が逆流してきて現在の話者を呑みこもうとする物語でもあるのではない

だろうか。回想物語の枠組みを一応とりながらも、語り体の統御にさからって表出される《幼児の意識》は、回想体の枠を揺るがせる。

鏡花は長編『誓之巻』⁽²¹⁾に着手してのち、鷗外調の文語体を用いた、一人称による半虚構・半自伝的な小説をさまざまな形で試みようとした。「龍潭譚」もそこから生れた作品のひとつである。ただ、『誓之巻』が結果的に、回想形式での私語りの体裁から逸脱していく様相を見せるように、⁽²²⁾「龍潭譚」もまた通常の一人称回想小説とは異なるものにならざるを得なかつた。ある意味で回想形式を無効化する小説なのである。そして「龍潭譚」における《幼児の意識》の表現は、本作の擬古文に替えて子どもたちの話し言葉の語りを採用しさえすれば、すぐにも「化鳥」の表現が生まれるところまで来ている。「龍潭譚」は鏡花の創作史において「化鳥」への画期的な飛躍を準備した作品だったのである。

【注】

- (1) 岡保生「龍潭譚」について（『文学・語学』平成元・8）
- (2) 「文芸倶楽部」二卷十三編・臨時増刊『小説六佳選』（明治29・11・3）
- (3) 由良君美「鏡花における超自然——『化鳥』詳考」（『国文学』

昭和49・3)

- (4) 秦恒平訳編『明治の古典4 高野聖 歌行燈』(学研、昭和56・10) 所収、秦恒平訳「龍潭譚」。

- (5) 村松定孝・笠原伸夫・三田英彬・東郷克美編著『泉鏡花』(桜楓社、昭和58・3) 所収「龍潭譚」脚注(東郷克美)は、「渠」は「姉」をさすものと考えられる。だとすれば「認められざりし」とあった方が文脈は通る」としている。

- (6) 寺田透『鏡花小説・戯曲選』(岩波書店、昭和56〜57) 解説、のち『泉鏡花』(筑摩書房、平成3・11)。引用は『泉鏡花』74頁。

- (7) 吉村博任「神隠幻想―「龍潭譚」論―」(「鏡花研究」昭和59・11)

- (8) M・コデイ・ポルトン訳『龍潭譚』(泉鏡花作「龍潭譚」英訳出版実行委員会、昭和62・5)。問題の箇所を《Happy I was that she found me, though all my tears had cried out for my sister.》と訳し、sheに左の注を付している。
《Who is the “she” of this sentence? In the original, it is even more enigmatic: *kare*, in classical Japanese, may mean either “she” or “he”. Various interpretations exist for this passage, but I take it to refer to the mysterious woman, introduced only later in this section, whom the boy encounters near the shrine.》

- (9) この時点で千里がその存在さえ知らなかった九ツ笹の女を「渠」と称しているという、寺田透の解釈はやはり通らないように思われる。《渠に認められしぞ幸なる》は文脈からみてその場その時の幼児千里の思考であり、回想者による後年の判断ではないだろう。同様の理由でポルトンの説も採らない。

- (10) 「四之巻」(「文芸倶楽部」明治29・9)に主人公新次の見る悪夢の場面があり、そこでも山から聞えるこだまの声が新次の心を惑わす。《ね、何にもあなたを呼んでやしないの。みんな僻耳です。新ちやんく〜てきこえたつて……そりや山鳩の声でせう。あれ〜あれ、鳴いてるのが聞えませう。》
／耳を澄せば果せるかな、遙かに遠く、三ツ山、四ツ谷、十森ともしもりの彼方あなたの、洞の中の奥深く鳴くかと思ふ心地せり。》(有明)

- (11) 同時代に「紅塵万丈」(「日本」明治29・11・23)の「飛入生」は、《千里を魔せし神の美しき女神なるは承知したれども果して之れが慈愛深き神様であるか又は悪魔なりしかあんなり朦朧に過ぎて物足らぬ千里を愛したる外形及び千里が後年に至りて尚其者を追懐する所を見れば彼は甚だ優しい者であるが御祈禱の為に落された工合では悪魔らしくも見える》と評している。

(12) 寺田前掲書77頁にいう「要するに「ふるさと」の冒頭、千里を負うて町に来た九ツ罨の赤つらの老爺が去るまでの一切は、千里の彷徨ということのほかは実は無かったことも知れないのだ」といった読みも、この小説に關して不可能ではない。またポールトン英訳の後書きは「もちろん、千里が経験したことは、毒虫に刺されたためにひきおこされた、単なる幻覚にすぎないだろう。(中略)『龍潭譚』に登場する「怪しき女」とは何者か。悪魔か女神か魔女か、それとも子供の熱にうかされた幻にすぎないのか。鏡花自身はわざと曖昧にしている。この作品も、「狐憑き」についてのありのままの記述とも読めるし、また子供の方向感覚喪失状態(略)と、死んだ母親を求める無意識の性的幻想についての心理的作品とも読める」と論じているが、適切ななまとめであるように思われる。

(13) 「勝手口」(「太陽」明治29・11〜12) 末章(十六)の次の箇所も参照。

「好男子、報いずばなるまい。何か?」

誰がためにかすべき、国家に責任を荷へる身の、渠とともに其時死することを得ざりし中尉は、愁然として、

「自殺、閣下。」とのみいふ。

傍線部分は中尉龍太郎が、想い人のお仙(渠)に死なれ、

軍人ゆえに彼女とともに死ぬことができなかったため、以来戦場に死に場所を求めて来たということを語っている。代名詞「渠」を先行詞なしで一種の婉曲語法として用いている例である。なお自筆原稿で当初どう書かれていたかについて秋山稔「勝手口から戦場へ―泉鏡花「勝手口」試論」(「日本近代文学」平成20・11)に言及がある。

(14) 英訳では左のように一部を直接語法にして訳している。

《There, they circled round me as I raved, my eyes afire, whispering — Look at his eyes, what a strange light in them! look at how they roll back in his head, I swear he's been possessed! — Come close you beasts, thought I, my teeth will tear you all to shreds.》

(15) 詩の全文「南山何其悲／鬼雨灑空草／長安夜半秋／風前幾人老／低迷黄昏暈／裏髮青襟道／月午樹無影／一山唯白曉／漆炬迎新人／幽壙螢擾擾」。原田憲雄「李賀歌詩編2」(平凡社東洋文庫、平成11・2)による。「月午樹無影」は「月午樹立影」と作る本も多い。

(16) 原田前掲書の注に「月が中天に上り、正午の日のような状態にあること。広異記に「世間の月午は地下の斎時」(太平広記卷三七二蔡四)といい、亡霊たちの地下の祭りの時間であるという」。

(17) 作品後半では《小提灯の火影あかきが》(あふ魔がとき)、《蠟の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて》(五位鷹)、《顔のあかき老夫》(渡船)、《姉上は袖もてわれを庇ひながら顔を赤うして遁げ入りたまひつ》(ふるさと)と用いられる。

(18) 八面楼主人「小説六佳撰」(「国民之友」明治29・11・28)

(19) 荒川漁郎「最近の創作界」(「太陽」明治29・12・20)

(20) 「日は午なり」は漢詩の「日午」「日当午」などから来る語法か。「日既午にちかし」(芭蕉「おくのほそ道」)、「三井寺や日は午にせまる若楓」(蕪村「新花摘」)。「あら、木」は伝統的に歌語や雅語とされていない。イチイの樹の意味で使うのは俗語または方言としての用法か。「妙齢になつても

白粉一トつ付ず、盆正月にもあら、木の下駄一足新規に買はうでもないあのお辰」(幸田露伴「風流伝」第五下)。

(21) 「一之巻」(「文芸倶楽部」明治29・5)、「誓之巻」(同30・1)の七編を一括して長編小説『誓之巻』と称する。次の拙稿参照。

(22) 拙稿「泉鏡花『誓之巻』論」(「国語と国文学」平成22・2)

参照。

*「龍潭譚」の引用には初出本文を用い、漢字は一部新字体にあため、ルビは適宜省略した。その他の鏡花作品の引用は『鏡花全集』(岩波書店、第二刷)による。引用文中の傍線・波線はすべて筆者による。